「おさしづ」第３巻における「個人の身上・事情」と「道」

おやさと研究所講師
澤井　治郎　*Jiro Sawai*

『おさしづ改修版』第３巻（明治26～28年）の「個人の身上・事情」について伺われた「おさしづ」における「道」の用例を整理する。第３巻には「個人の身上・事情」の「おさしづ」は331件あり、そのうち「道」が用いられるのは116件、３回以上「道」が用いられるのは31件である。

これまでの「個人の身上・事情」における「道」

「個人の身上・事情」の「おさしづ」における「道」の用例の展開を理解するために、まず、第１巻および第２巻における「道」の用例の特徴を確認しておきたい。第１巻では、明治21年の教会本部設置認可後、「神の道」「神一条の道」と「世界の道」「世上の道」という言葉の対比による諭しが多くみられる。そして、「世界の道」に比べて「神の道」は一見したところ通りにくく、細道を行くようなものに見えるかもしれないが、それこそが先の楽しみとなる親神の望まれる「道」である、と繰り返し説かれている（本誌、2017年７月号）。第２巻では、苦しかったり、つらかったりする人生のいろいろな局面を表すさまざまな「道」と親神の教える「一つの道」という対比がみられる。この「一つの道」は、第１巻において「神の道」として諭されていると思われるが、個人の身上・事情という脈絡に即して、さまざまな人生の歩み方があるなかで、ただ一つの最も大事な生き方を指し示す言葉となっている（本誌、2018年11月号）。

このように、第１巻においても、第２巻においても、「道」という言葉を大きく２通りに対比させて、人間の歩むべき道、進むべき方向について、“△△でなく○○である”という仕方で、理解しやすいよう説明しながら諭されているということが特徴的である。

しかし、今回取りあげる第３巻では、そうした対比は見当たらない。○○の道という形で「道」を形容する言葉が付されることも、第１巻や第２巻に比べてかなり少ない。むしろ、「道」という言葉が自明のものとして単独で用いられることが多くなっている。以下では、いくつかの例をあげて、その用例を確認する。

この道

「個人の身上・事情」として今回取りあげる「おさしづ」において、最も多いのは身上伺である。第３巻には、「身の障り」について、「道」を用いて諭されている「おさしづ」がある。そこでは、「一人のためとは思うな。皆よう聞き分け。」と、願い出ている個人だけでなく、皆が聞き取るべきことであると念を押された上で、次のように言われている。

> この道どういう理でなるぞ。……さしづ〳〵の道であろう。暖（ぬく）い中に居れば暖いもの、寒い中に居れば寒いもの。この暖い寒いの理を聞き分けず、銘々心の理を働かす処、身の障りの台である。これから悟れ。銘々思わく思うも、めん〳〵思わくを立てるも、暖味（ぬくみ）水気があればこそ。この道艱難の理を聞き分け。（永尾よしゑ身上願　さ27・12・12）

「暖い中に居れば暖いもの」また「寒い中に居れば寒いもの」というのが当たり前と思っているが、それは大いなる守護の現れであることを聞き分けてもらいたい。銘々が我が身勝手の心から暖い寒いと言って不足をする。それが身の障りの台となる。このところから、「この道」がどういう理で成り立っているかを悟るように諭される。そもそも、「暖味水気」という大いなる守護によって生かされているからこそ、銘々勝手の思惑をたてることができる。その生かされているということが「この道」の根本の理合いであると言われる。このように「身の障り」を話の台として、生かされて生きているという「この道」の根本を悟りとるように説かれている。また、このところから、「道」という言葉は、いわば「かしもの・かりもの」の教えを内包する用語であることが分かる。

道である／道でない

また、第３巻の「個人の身上・事情」の「おさしづ」をまとめて読んでいて、印象的だったのは次のような用例である。

> 合い言問い言無くしては道であろうまい。（井筒梅次郎母こと七十八才身上願　さ26・1・21）
>
> 急いで道という。早く〳〵通じて理を聞かして、内々それ〳〵運ぶが道という。（日本橋分教会長中臺勘蔵身上の願／押して上原帰京の願　さ27・9・26）
>
> 尚々道運ばにゃならんは道、どうでもよいはでは道でない。（橋本清、喜多治郎吉両人越後佐渡地方に派出の件伺　さ28・8・18）
>
> これまで道があって道が分からん。広くするなら、広くの心を台として運ばにゃならん。どんな所へも談じにをい掛けて運ぶが道と言う。（松村吉太郎小人チヱ出直しの後あと〳〵心得のため願　さ28・11・28）

ここに挙げた用例は、ある具体的な行いや物事の進め方について、「理を聞かして、内々それ〳〵運ぶが道」「どんな所へも談じにをい掛けて運ぶが道」のように○○するのは道である、あるいは、「合い言問い言無くしては道であろうまい」「運ばにゃならんは道、どうでもよいはでは道でない」のように○○しないのは道でない、というように「道」という言葉でその良し悪しが示されている。特に、「運ぶ」ということが「道」にそったものであるという趣旨がなんども出てきている。その文脈から、教祖の教えを待っている人にきちんと伝えに行くということがこうした表現で示されていることが分かる。このように、「道」という言葉自体に何の説明が付されなくとも、人の歩み方の基準となる固有の意味を持ったものとして用いられることが目立つようになっている。

以上、第３巻における「個人の身上・事情」の「おさしづ」における「道」の用例を確認してきた。第１、２巻とは「道」の用いられ方がかなり異なっているように見受けられる。第１、２巻では人が進むべき道について、たとえば、「神の道」「細い道」「天然自然の道」「一つの道」など、それがどのような道であるのかを説明する言葉が付されることが多い。しかし、第３巻ではそうした説明はかなり少なくなり、もっぱら「道」という言葉だけで、固有の意味を持つものとして用いられる。こうした、「道」という言葉が説明のいらない固有の意味を持つものとして展開しているところは、「道」が一つの教語として定着していく過程として見ることができるだろう。